

8. 中学校英語の新しい授業の構想と展開

山 本 新 治

1. これからの時代性と自己教育力の育成

21世紀を目前にして、学校教育の変革が求められている。このことは、現行指導要領が改訂された趣旨の中に示されている。すなわち、「自分で考え、判断し、正しく行動」する児童・生徒の育成、言い換えれば、児童・生徒が「思考力、判断力、表現力、創造力などの資質」を身に付けるという「新しい学力観」の中に示されている。

(1) これからの時代性

新しい学力観が求められるような時代性とは、どのような特徴を持っているのであろうか。未来の時代性を考えるにあたり、過去になかった現象ととらえて考えると、次のような特徴を挙げることができるであろう。

・複雑化する社会 ・不透明な社会 ・流動的な社会 ・高齢化する社会 など

科学技術の進歩や工業化の発展等は、その特徴として「光」(便利)と「影」(不便)をもたらした。今後、多様な価値観は、さらに複雑化する社会を産みだすことも想像にかたくない。また、その複雑化は次ぎなる社会の在り方を容易には予測できない不透明性を予知させる。したがって、社会そのものが非常に流動的で、次に何が起こるか分からない。世界に起こっているイデオロギーの変化、世界各地で起こっている地域紛争、民族紛争の例を挙げるまでもない。さらに、高齢化が一層進展していくことは、昨今の種々の統計や調査によっても明らかである。

(2) 生き抜いていく能力

このような時代背景にあって、これからの時代を生き抜いていくことは、そうたやすいことではない。そのためには、どのような能力を必要とするのか。実はこのことが、これからの、否、いま学校教育の変革が求められている理由なのである。その能力のいくつかの例を挙げてみよう。

・問題発見能力 ・問題推理能力 ・問題分析能力 ・問題判断能力
・問題解決能力

当面の問題が何であるのかを明確に捉える力、何が問題なのか見抜く力が重要である。次にその問題の本質を見抜く力、推理していく力、問題の本質を分析する力が大切になる。こうして問題を適切に判断し、解決していく力が養われていく。

(3) 自己教育力

自己教育力の意義を一口で説明するのは難しいが、端的に言えば、上述した様々な能力を活用して課題解決を図る力と言い換えることができる。学校教育で言えば、教え込みでは習得で

きない「学びの自立」と言い換えることができる。すなわち、「自ら学ぶ意欲と主体的に課題に対応できる能力」のことと考えられる。

(4) 自己教育力育成の視点

「学びの自立」ができるようになるには、・内発的な学習意欲を育て ・学び方の習得を身に付け ・生き方へのかかわりを積極的に求めること、などが大切になる。

内発的な学習意欲を育成するためには、成就感や満足感を味わうことができるよう、学習意欲に裏付けられた指導が重要である。学習者を情緒的に安定させ、強い興味・関心を持たせ、明確な課題意識などによって学習課題に取り組ませる指導の在り方が強く求められる。「学び方の習得」とは、児童・生徒一人一人の学習の仕方が違うことから、個性に合わせた指導法の工夫・改善を行うことと捉えよう。帰納的な学習が得意な生徒、一方では、演繹的な学習に興味を覚える生徒など様々であろう。一斉指導の中では演繹的に、個別学習の中では帰納的に指導を行うなどの工夫が待たれる。

生き方にかかわりをもつとは、人を大切にし、自分の主張をもち、自分で判断して行動できる「自立性」や、社会的な存在であることを理解し、他人とのつながりを考え、協力していくことのできる「社会性」、さらに、素直に感じることでできる心情的な感受性や感じたことへの疑問をもち、物事の本質を追求する「感性」を身につけることであると考ええる。

「無関心 ⇨ 無気力 ⇨ 嫌悪 ⇨ 逃避 ⇨ 放棄 ⇨ 挫折 ⇨ 拒絶」というマイナスの学習態度から、「面白い・関心 ⇨ やってみる・意欲 ⇨ できるか・不安 ⇨ やってみる・挑戦 ⇨ がんばる・努力 ⇨ できた・克服 ⇨ さらにやってみる・挑戦」という積極性が育つよう指導をいつも問い直すことが重要である。

2. 新しい学力観に立つ外国語（英語）の学習指導の在り方

「これからの時代性と自己教育力の育成」で述べた内容は、外国語（英語）科（以下、英語科と記述する）においても当然求められなければならない。すなわち、英語科の指導を通して、視野を広げ、多様な見方や考え方を身に付け、洞察力、意志力を育て、連帯感や鋭い感受性を養うようにしなければならない。

雑誌「学遊」(No. 12, 1993. 12)に、バンクーバーで学ぶ日本人留学生の語学習得方法についてのアンケート調査による興味深い結果が紹介されている。それによると、

- ・覚えるよりも「使うこと」
- ・よく使う表現や言い回しなど自然な会話の習得をすること
- ・相手の言いたいことを推察すること
- ・相手の問いに、1つだけでない答え方の幅広さを習得すること

が大切と考えられている。すなわち、①相手を意識した外国語の会話力 ②場に応じた柔軟な対応力 ③相手の立場や意図を推察する力が大事である、としている。これらの内容をそのまま我が国の英語教育に当てはめようとは思わないが、しかし、言語習得にかかわる重要な視点を示唆しているものと考えられる。新しい学力観に基づいた英語の学習指導の在り方を考えるとき、これらの視点から改善を図ることが重要であろう。

3. Communicative Approach ・指導法の変遷とその学習展開

英語教師に求められているものは何か、と問われれば、時代の変化に対応する柔軟性と時代をリードする進取の気性であると答える。時代の変化に対応する柔軟性とは、時代の要請に立った英語教育の推進であり、時代をリードする進取の気性とは、生徒の実態に応じた指導に果敢に取り組むチャレンジ精神と考える。確かに、教育には、「不易流行」がある。「変わらないこと」と「変わらなければならないこと」がある。英語の教師に求められることは、この「流行」即ち「変わらなければならないこと」である。自分の教えられたやり方で教えることは、内容によっては理のあるものもあろう。しかし、言葉が時代によって変化し、学習者の実態が変わり、時代の要請に新たな側面が加われば、当然のこととして、言葉の学習、言葉の指導も変わらなければならない。

伝達中心の英語教育、言語活動を重視した指導、言語学習から言語使用を目指した指導の工夫などよく耳にする。これは、Communicative Language Teaching (Wilkins, van Ek), Communicative Approach to Language Teaching (Brumfit), Communicative Methodology in Language Teaching (Brumfit), Teaching Language as Communication (Widdowson), Interactive Language Teaching (Rivers) から由来しているものである。すなわち言語の習得過程を重視した言語指導の在り方が重視されるようになってきたのである。これまでの指導では、文の構造に焦点が当てられ、正確な文を作る指導が中心であった。この文構成能力中心の指導から、実際に言語を、いつ、どこで、どのように使うかに焦点を当てた指導、言語の運用能力に力点が置かれる指導、言わば、文の機能>文構成能力という構図の指導に注意が注がれるようになったのである。この指導では、・人を説得したり、勧誘したり、適切な挨拶ができたり、情報の入手や交換等を行う ・学習目的が学習者に興味を沸き立たせ、学習を自発的に行う動機を与える ・実際のコミュニケーション（聞く、話す、読む、書く）に近似した「機能的役割場面」の設定を行うなど、を通した言語の習得などに焦点が当てられる。ゲームを通した疑似言語活動、ロールプレイを通した言語の役割練習、課題解決的な学習を通した言語活動、シミュレーションを通した指導など言語使用の学習・指導形態の工夫を図る教育の在り方などが模索されてきている。したがって、教師の役割もこれまでのような一斉指導における画一的な指導者としての役割から、・生徒が主体的に活動ができるように指導・援助する ・情報の提供者やモデルとしての役割を行う ・わかりやすく活動できる手順や方法を提示する ・クラスの雰囲気作りやチーム分けの指示をするなど、言わば、アドバイザー、コーディネーターやカウンセラーとしての役割等を果たすことが重視される。

このように英語教育が、drastically change を果たさなければならない時代の要請を受け、学習指導要領が改訂されたのである。

4. 英語科の目標の具現化

公立中学校の学習指導要領に示されている英語科の目標は以下の通りである。

- (1) 英語で理解し、英語で表現する基礎的な能力を育成する
- (2) 英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する
- (3) 言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を養う

これら3目標の具体的な内容を考えてみよう。

(1) 英語で理解する基礎的な能力の育成

「理解する基礎的な能力」とはどんな能力を言うのであろうか。Widdowson の例を紹介して「理解する基礎的な能力」の1つの在り方を述べることにする。

A : That's the telephone. (電話よ)

B : I'm in the bath. (いまお風呂よ)

A : O. K. (わかった)

簡単な対話文であるが、それぞれの対話文の機能を考えてみると、最初のAは「Bへの電話だから電話にでて」という「依頼」であり、Bは、「入浴中」という「ことわり」であって、内包的には「代わりに電話にでて」という「依頼」と考えられ、これに対して次のAは、「承知・対応」という機能的な対話文を構成していることに気付くであろう。したがって、この対話文に表れてこない内包した英文を付け加えれば次のようになる。

A : That's the telephone. (Can you answer it, please ?)

B : (No, I can't answer it, because) I'm in the bath.

A : O. K. (I'll answer it.)

となる。このように、言葉の理解を機能的に捉えることができるよう指導することが大切である。Do you have a pen ? に対して Yes, I do. と答えるか、Here it is. か、黙って鉛筆を差し出して使っていいと行動で示すか、どちらが「理解する基礎的な能力」と見るかは言うまでもなからう。

それでは、「表現する基礎的な能力」とはどんな能力を言うのであろうか。

A : Where is my book ?

B : It's on the table.

A : O. K.

この対話文では、Bの答え方は文法的にも機能的にも正確な英文である。このような場合 B : On the table. または、B : Table. でもよいのであって、何ら答えとして齟齬を生じない。このように、内容が通じればよいとするくらいの英文の表現が「表現する基礎的な能力」であり、継続した対話ができるよう指導をしていくことが肝要になる。特に、「聞くこと」「話すこと」の指導では重視したい視点である。

(2) 英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する

積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する視点を考える場合、この視点には、あくまでも「コミュニケーションを図る」という限定がついていることに留意する必要がある。すなわちコミュニケーション活動を通して「積極性」が育成されるという考えに立って指導を行うことが重要なのである。「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の言語活動を通して「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を身に付けるよう指導したい。この4領域の活動を具体的に示しているのが、学習指導要領の〔各学年の目標及び内容・2内容 (1) 言語活動〕に示されている指導事項である。ここに示されている内容が具体的な活動になるよう、〔指導内容〕〔指導方法〕〔指導形態〕に改善・工夫を加え授業を構成することが重要である。

(3) 言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を養う

英語という言語の背景には、それを生み出した「文化」がある。日本語に例を取り、日本人のもつ価値観や日本文化の特徴などを考えてみればよい。例えば、自己主張をあまりしない、没個性、主語の省略、言い回しの曖昧さなど、英語圏ではなかなか理解されない特徴を持っている。英語においても同じである。I think that I can't ~. でなく、I don't think that I can ~. という表現の仕方、Yes や No が文頭にくる明確な答え方、主張すべきことははっきりと主張することが大切とされる考え方など、様々なものの見方や考え方に特徴がある。このように言語や文化のもつ特徴を理解し、その上に立ってコミュニケーションを図る指導を行うことが(3)の目標の達成に役立つ。そして、国際理解の基礎はこのような指導を通して培われるものであり、生きて働く力として言葉が身に付いていくことに留意しながら指導を進めていく中に育成されるものである。

5 学習指導案の具体例

英語科のこのような目標を達成するには、日頃の教科指導に一層の改善・工夫を加えることが重要である。ここでは、中学校1年生の指導案の作成を具体例にとり述べることとする。なお、紙面の都合から「指導過程」までの指導案例とする。

英 語 科 学 習 指 導 案

1. 日 時 平成3年1月21日(月) 第5校時 13:30 ~ 14:20
2. 学年・組 1年B組(男子12名 女子15名 合計27名)
3. 教 材 Total English Book I Second Edition
Lesson 11 「オーストラリアはおもしろい」
4. 教 具 教科書準拠テープ、チャート・カード
5. 本科のねらい
(1) 言語活動の観点から

この課では、Listen & Speakに重点をおく。また、ここではオーストラリアが南半球にあるため日本とは季節が逆であり、そのため「クリスマスは当然冬に当たる」という固定観念のある日本人にとって、「オーストラリアでは、クリスマスは夏に行われる」という興味深い事実を通して、言葉を通して英語の学習する意義を生徒に理解させる。このように、言葉の学習を通して積極的に外国の事象に興味・関心を持たせ英語学習への動機付けを行うことをねらいとする。

(2) 言語材料の観点から

- ① 現在進行形（be動詞＋～ing 形）を用いて日常の動作を表現できるようにさせる。
- ② be動詞の疑問文の作り方や応答の仕方を理解させ、積極的に質問、応答をさせる。
- ③ Whatを用いた現在進行形の疑問文の応答に慣れさせる。
- ④ 1月から12月までの月名をまとめ、その練習をさせる。

(3) 国際理解の観点から

前課ではカナダの学校生活等を学習したが、この課ではさらに、話題が同じ英語圏であるオーストラリアを取り扱う。生活習慣の違いや行事の季節の違い、その祝い方の違いを学習することによって、日本以外の国に興味を抱かせるとともに、国際的視野の拡大を図り、国際理解の基礎を養う。

6. 指導計画（5時間扱い）

- 第1時限：Section A の内容の理解を図る。さらに、現在進行形（～している）は「be動詞＋～ing」を用いて表現できることを学ぶ。
- 第2時限：Section B の内容の理解を図る。Section A の重要文の復習をし、現在進行形の疑問文やその応答の仕方を理解し、それらを使って、身の回りのことを積極的に表現する。
- 第3時限：Section B の重要文の復習をするとともに、whatで始まる現在進行形（本時）の疑問文や応答文を理解し、それらを使って表現する。
- 第4時限：前時の復習をするとともに、Section C の内容を理解する。
- 第5時限：Section D の内容を理解するとともに、月や季節の名のまとめをする。

7. 生徒の実態

都心の中学校と比べ、本校の生徒は幼稚園、小学校、中学校とずっと同級生として過ごすことが多く、切磋琢磨しようとする気持ちが薄い。発言も消極的で何事にも興味を余り示さない傾向が感じられる。生徒の関心や意欲を育てるため、特に、「音声を重視した授業」「わかりやすい授業」をモットーに授業を進めている。

8. 本時の目標

① 言語活動目標

Whatで始まる現在進行形の疑問文を用いて自分の身近なことについて話したり書いたりすることができる。

② 言語材料目標

Whatで始まる現在進行形の疑問文の作り方とその応答の仕方を身に付ける。

③ 態度目標

Whatで始まる現在進行形の疑問文や応答文を使って、積極的に話したり書いたりする態度を養う。

9. 指導過程（省略）

6. 指導と評価の一体化

指導したことを評価することは当然のことであるが、ともすると、実力だめしとか応用力をみるという理由で、既習範囲を超えて出題するようなことがしばしばある。指導と評価の一体化の原則からすれば、これはルール違反であり、英語への関心・意欲を削ぐ結果となる。ここでは評価の在り方を述べるとともに、それをどのような形で生徒にフィードバックさせるかという視点から簡単に述べることにする。

(1) 評価の目的

① 生徒の学習目標がどこまで達成されたかの確認をするもの

学習した内容をどこまで理解しているか、適切な問題作成を通して評価する。その際、それがどのような趣旨で出題されたのかを明確にすることが大切である。

(例1) 次の日付を例にならって英語で書きなさい。

※日付を正しく書くことができるようになる。

(例) 元旦 → January 1

1. 本校の開校記念日 → (解答例) May 1
2. クリスマス → (解答例) December 24
3. あなたの誕生日 → (解答例) July 28

(例2) 次の英文が説明しているものを、別な英単語1語で答えなさい。

※文の内容を正しく理解し、別な英単語で表現できるようになる。

1. It is an eighth month of the year.
2. We usually watch it every day. We can watch news and baseball games on it.

② 指導の反省と改善を行う資料とするもの

- ・生徒の成長と発達を促す授業改善につながる指導改善に役立つものとする。
- ・設定した指導目標がどれだけ達成されているか、達成不十分の理由は何かの資料とする。
- ・評定を行う際に活用するなど、評定の基礎となる資料にする。

③ 生徒自身が学習習慣を確立する手だてになるもの

- ・生徒自身の学習方法が適切であったか、そうでなかったかの判断資料として活用する。

今後どのような学習の仕方が適切であるかアドバイスする資料とする。

- ・評価の結果を考える自己評価能力の育成の基礎資料とする。

学習への意欲付けを図る意味から、学習結果を自己判断する能力を養うための資料とする。

(2) 評価の課題

① 「テスト」の改善に役立てる。

- ・指導に生かすテストを作成し実施する。

作成と意図（上述）を明確にする

実施時期を工夫する

テストの処理と活用の仕方を予め設定する

- ・「測定」から「評価」への手だてとする。

何ができたかより、どうすればできるようになるかの手だてとする

② 補助的な記録簿を作成し記録する。

- ・日常の学習指導の過程を継続的に把握し記録する

- ・観点別評価の視点を考慮に入れた記録簿を作成する

【参考文献】

- 1) 東京都教育委員会「東京都の国際理解教育」平成元年度～平成5年度。
- 2) 東京書籍「自己教育力の育成」1992。
- 3) 文部省「中等教育資料」1992.10。
- 4) 「学遊」1993.12。
- 5) 伊藤嘉一「現代英語教育」1989.6。
- 6) 文部省「中学校学習指導要領 外国語」1988。
- 7) 文部省「英語を聞くことの指導」1991。
- 8) 文部省「コミュニケーションを目指した英語の指導と評価」1993。
- 9) 影浦 攻・山本新治「中学校英語科の評価・授業改善と通信簿」1994。
- 10) 和田 稔「コミュニケーションを図ろうとする態度の育成と評価」1994 開隆堂。
- 11) H. G. Widdowson 'Teaching Language as Communication' Oxford Uni. Press.
- 12) J. O'Sullivan 'Teaching English in Japan ' In Print Publishing Ltd.
- 13) W. Littlewood 'Communicative Language Teaching 'Cambridge Uni. Press.